

●書学書道史学会

会 報

第 11 号

平成18年(2006)6月1日発行

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)3464-8521(代)

理事長就任にあたって

古 谷 稔

このたび、はからずも理事長を拝命することになりましたが、初代・西林昭一、二代・興膳 宏の両理事長の後任として、身の引き締まる思いです。不慣れではありますが、よろしくお願いいたします。

本年は書学書道史学会の発足後、十七年目を迎えることとなりました。当初の目的は、東洋の文化を代表する「書」の学的追究とともに、書文化の活性化を期して、書家・研究者の横のつながりや情報交換の場を必要として設立されたものと理解しています。創立当初の学会立ち上げには、書学書道史に接点をもつ諸分野の意気盛んな方々が発起人となってスタートした様子が想い起こされますが、当時、私はまだ入会しておらず、学会への参画は少し後になります。新執行部では、杉村邦彦・副理事長、萱原 晋・事務局長など、創立当初からの役員はわずかに留まり、大きく様変わりしたものの、会員としてはまだ当初からの在籍者も多く、今後、背後で種々サポートしていただけるものと、心強い限りであります。

学会は本来、温故知新の精神に基づき、現代のニーズに応えるとともに、未来の課題へ向けてこそ存在価値があると思われまふ。そ

れには、まず各会員にとって活動しやすい環境づくりが大切であり、同時に会員相互の協力体制が重要となります。

これまでの歩みのなかで、たとえば国内外の関連諸分野の研究者に参加と論文発表を呼びかけ、書学書道史研究の回顧と二一世紀への展望を見定める機会とすべく開催された、二〇〇〇年の「第四回国際書学研究大会」は記憶に新しいところです。この画期的な中国・韓国・日本と、漢字文化圏を中心とする国々の研究者の集いにおいて、さまざまな問題提起がなされ、斯学の発展に大きく貢献したことはいうまでもありません。

こうした大がかりな国際的大会も重要ですが、毎年実施される国内の大会もまた、書学書道史研究の共通理解の場として、不可欠な機会と思われまふ。各会員の多方面にわたる研究発表も確かに意義あるものといえますが、さらに今後は、その都度共通テーマを設定し、それに関する研究発表と同時にシンポジウムを併催するなど、大会の運営の仕方によっては、学会の進路も変わっていくものと期待されます。これに関連した取り組みとして、昨年度から普及委員会(本年度から国内局に編入)による若手研究者のための研究発表会や、書学研究のための基盤づくりともなる会員のための鑑賞セミナーが開始されています。

二一世紀に入って六年目の今、地球上の環境汚染や世界情勢の悪化等々、世界各国や国際間での問題が山積するなか、もともと人類に必要とされる人間性を育むことへの配慮が忘れ去られてきています。「書」がそのような役割を果たす力を内蔵しているならば、今こそ皆さんと共に心を新たに、「書」の本質追究に向けての取り組みを強めたいと願っています。

*

※第Ⅸ期新役員会の構成、および新役員紹介は4ページに掲載。

第17回書学書道史学会大会へのご案内

事務局

第17回書学書道史学会大会は、大阪教育大学教育学部キャンパスで、以下の日程で開催されます。

詳細は本会報の次号（十月一日発行予定）の送付時に研究発表レジュメとともに「最終案内」としてお知らせする予定ですが、現在までに固まっている大要は、以下のとおりです。

○理事会 十一月十日（金）午後四時三十分から、大阪・天王寺駅隣接の東映ホテルにて。

○大会 十一月十一日（土）午前九時、大阪教育大学柏原キャンパスにて受付開始。九時三十分から総会、十時三十分から研究発表。午後五時終了。

○懇親会 十一月十一日（土）午後六時半から、大阪・天王寺の東映ホテルにて開催予定。

○特別展覧学会 十一月十二日（日）午前十時から、大阪市立美術館（大阪市天王寺区茶臼山町一―八二）にて。本学会幹事・弓野隆之主任研究員による列品解説が行われる予定。詳細は次号。

○大会会場への交通 JR新幹線「新大阪駅」から、大阪駅経由、環状線で鶴橋駅下車、近鉄大阪線で「榛原」または「名張」行きに乗り換えて、「河内国分」駅下車、タクシー十分。新大阪駅よりの所要時間は一時間余。「京都駅」から、近鉄京都線で「大和八木」で乗り換えるルートでは、京都駅より「河内国分」まで約一時間三十分。

なお、「河内国分」隣の「大阪教育大前」駅下車は当日は交通不便です。

○宿泊用のホテルは各自で手配をお願いします。

○理事・監事・幹事各位については、前日の理事会・準備会等の関係もあり、事務局にて天王寺の東映ホテルにシングル・ルームを確保していますから、ご希望の方はご利用下さい。

▲大阪教育大学・柏原キャンパス



第2回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー」開催報告

平成18年1月14日（土）午後1時より、京都国立博物館において二時間以上に渡って、第2回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー」が開催された。

昨年（平成17年）2月27日、東京の五島美術館にて第1回特別鑑賞セミナーを開催し、参加者から多くの賞賛の声をいただいた。年一回のスローペースではあるが、当普及委員会としてはこうした企画を確実に定着させ、会員の方々への普及活動の一環としたいと約束していた。

第2回の鑑賞セミナーは、国宝級の名品が揃っている京都国立博物館を会場にして開催された。関東地区だけに偏らないようにと配慮した結果でもある。開催に先立ち、前年まで京都国立博物館館長の任にあたられていた興膳宏・本学会理事長から、同博物館へ可否を打診していただき、実現の運びとなった。

当日の参加者は、およそ四〇名であった。参観のために提供された会場は、通常では部外者は決して入場できない特別室であった。

最初に興膳理事長から、同館文化資料課保存修

本年度・第17回大会研究発表募集

今秋の第17回大会は、大阪教育大学の柏原校舎で下記のとおり開催されます。2日目の特別鑑賞行事は、今年創立70周年を迎えた大阪市立美術館が準備中の記念特別展の見学を予定しています。館側では、大会の時期には特に必見の書蹟類の展示を計画中のことです。ご期待下さい。本学会が大阪の地を踏むのは、故大庭脩博士が館長でおられた大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された第7回大会について二度目です。柏原校舎のキャンパスは高台に位置する自然ゆたかな環境です。ぜひ奮ってお申し込み下さい。

記

- 1) 日時：平成18年11月11日（土）午前～午後
- 2) 発表時間：各40分間（質疑応答10分を含む）
- 3) 申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、800字程度のレジュメを別紙で添えて下さい。
- 4) レジュメの形式：発表決定の方のレジュメ集は、10月1日発行の本会報第12号とともにお送りする予定です。形式は原則としてワープロで作成し、テキスト形式でフロッピーディスクに保存して提出して下さい。（メール可）
- 5) 申込締切：平成18年7月15日（土）＝必着＝
- 6) 決定と通知：学会理事会および大会運営委員会で決定し、個別にお知らせします。

※本大会発表については、編集局は学会誌『書学書道史研究』第17号（平成19年秋刊）への論文投稿申し込みを受理したものと扱いますので、改めて学会誌への投稿申し込みは不要です。

※発表者の論文原稿の締切は、平成19年3月末日です。原稿の採否は査読委員会で決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集局まで文書でお問い合わせください。

※大会発表申込書とレジュメ（フロッピーディスク添付）は、封筒に「発表申込・レジュメ在中」と明記して、下記宛にお送りください。不着事故をさけるため、配達記録郵便または宅配便をご利用ください。

〈送り先〉〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町29-35 ヴィラ桜ヶ丘ビル7F

書学書道史学会国内局・大会運営委員会 宛

復指導室長の赤尾栄慶氏（本学会会員）のご紹介も兼ねて開会の挨拶をいただき、その後、赤尾氏より列品解説をしていただいた。窓越しに冬の柔らかな日射しを感じながら、机上および壁面に展示された名品の数々をガラスケースなしで間近に鑑賞できた。

なお、閉会にあたり、京都国立博物館並びに赤尾栄慶氏のご厚意、ご尽力に対して、本学会の杉村邦彦、副理事長から謝辞が述べられた。今回の鑑賞品目は、以下の通りである。

〈今回の鑑賞品リスト〉

- ① 遊承相蔵玉泉本蘭亭神品（宋拓）
- ② 国宝 世説新書巻第六残卷
- ③ 論語集註草稿 朱熹筆
- ④ 汝帖（宋拓）
- ⑤ 余清齋本評紙帖（明拓）
- ⑥ 陶淵明・飲酒二十首 文徵明筆
- ⑦ 臨王献之鵞群帖 王鐸筆
- ⑧ 五律「老景信口」 傅山筆
- ⑨ 国宝 新撰類林抄巻第四残卷
- ⑩ 国宝 古今和歌集（本阿弥切）
- ⑪ 重要美術品 石山切（伊勢集断簡）

●第Ⅷ期役員会発足

任期満了に伴う役員改選選挙が、改正された選挙管理規程に則り、二月十日～三月三日を投票期間として実施されました。選挙管理委員会による開票、当選者決定を受けて、三月二十五日に開かれた第三十八回臨時理事会において、以下の「第Ⅷ期役員会」が発足致しました。今期新役員の任期は、平成二十年三月三十一日までとなります。(○印＝新任)

【理事長】 ○古谷 稔 (大東文化大学教授)

【副理事長】 ○大橋修一 (埼玉大学教授)

杉村邦彦 (四国大学教授) Ⅱ国際局長

【常任理事】 菅原 晋 (カリタス女子短大講師) Ⅱ事務局長

○河内利治 (大東文化大学教授) Ⅱ国際局長

澤田雅弘 (群馬大学教授) Ⅱ会報委員長

○富田 淳 (東京国立博物館文化財部) Ⅱ国際局長

中村伸夫 (筑波大学助教授) Ⅱ編集局長

○森岡 隆 (筑波大学助教授) Ⅱ学術局長

○横田恭三 (跡見学園大学助教授) Ⅱ国内局長

【理事】 ○池田利広 (大阪教育大学助教授)

○萱のり子 (大阪教育大学助教授) Ⅱ副国内局長

○河野 隆 (大東文化大学助教授)

○菅野智明 (筑波大学助教授) Ⅱ副編集局長

○下野健児 (花園大学助教授)

杉浦妙子 (二松学舎大学講師)

鈴木晴彦 (日本大学教授) Ⅱ事務局長

○鶴田一雄 (新潟大学教授)

名児耶明 (五島美術館学芸部長)

福田哲之 (島根大学教授) Ⅱ副学術局長

浦野俊則 (二松学舎大学特別招聘教授)

野中浩俊 (新潟大学教授)

【幹事】

小川博章、柿木原くみ、笠嶋忠幸、○亀田絵理香、高城弘一、

○谷口邦彦、○永由徳夫、○鍋島稲子、○森上洋光、弓野隆之

今期新役員の専門領域につきご回答いただきました。◎印は著書、○印は論文、◆印は研究活動(出品・口頭発表等)を示します。

〈新役員紹介〉

【理事長】

古谷 稔 日本書道史

◎『秋萩帖と草仮名の研究』二玄社 一九九六年

○『後白河法皇の仮名書法と「梁塵秘抄断簡」―書の「ゆらぎ」と筆跡考証の視点―「MUSEUM」五六三号(東京国立博物館)一九九九年

【副理事長】

大橋修一 中国書道史

◎『書学拳要』(執筆) 藝文書院 二〇〇二年

○『文房四宝』の研究―造紙・序説―「大東書道研究」第一二号

(大東文化大学書道研究所) 二〇〇五年

杉村邦彦 近代日中書法文化交流史

○多胡碑の朝鮮・中国への流传について『古代多胡碑と東アジア』

山川出版社 二〇〇五年

○王羲之と嵇康「書道文化」創刊号(四国大学書道文化学会)二〇〇五年

【常任理事】

菅原 晋 日本現代書史

◎特になし

河内利治 書道学

◎『書法美学の研究』汲古書院 二〇〇四年

◆個展 Paris「Calligraphie Kunpei KAWACHI」二〇〇五年

澤田雅弘 中国書道史

○潤例の発生と展開―明・清における文人売芸家の自立―「書学書道史研究」第七号 一九九七年

○偽刻家Xの形影―同手の偽刻北魏墓誌群―「書学書道史研究」第一五号 二〇〇五年

富田 淳 中国書道史

○『書譜』撰述の形体について「MUSEUM」第五四二号(東京国立博物館)一九九六年

○関于日本現存之「喪乱帖」・「孔侍中帖」・「妹至帖」(『中日古代書法珍品集』上海博物館 二〇〇六年)

中村伸夫 中国書道史

◎『中国近代の書人たち』二玄社 二〇〇〇年

◆日展(一九八二年)

森岡 隆 日本書道史

◎『深山龍洞 書芸術の軌跡』日本書学研究会 二〇〇六年

◎寸松庵色紙の伝存点数および改竄の一端「書学書道史研究」第一

四号 二〇〇四年

横田恭三 中国書道史

◎戦国および秦における簡牘文字の変遷とその特色—楚簡と秦簡の

字形・字体を中心にして—「長江流域文化研究所年報」第二号

(早稲田大学長江流域文化研究所) 二〇〇三年

◆「統一後の秦國中書体的真相と書家的意識」紀年馬王堆漢墓發掘

三〇周年国際學術討論会(湖南省長沙市) 二〇〇四年

【理事】

池田利広 篆書法

◎鄭板橋の書法(「鄭板橋」芸術新聞社 一九九七年

◆日展(一九九五年)

萱のり子 日本書学

◎『書芸術の地平—その歴史と解釈—』大阪大学出版会 二〇〇〇年

◎科研「東アジアにおける鑑賞教育の現状調査ならびに比較研究」

(基盤研究B(1) 二〇〇四—二〇〇六年度)

河野 隆 篆刻

◎『篆刻ハンドブック』可成屋 二〇〇五年

◆第50回現代書道二十人展(二〇〇六年)

菅野智明 中国書法史

◎阮元における東晋書法觀の変遷「書学書道史研究」第一五号 二

〇〇五年

◎梁啓超の北碑論「書学書道史研究」第一四号 二〇〇四年

下野健児 中国書道史

◎祝允明の狂草書法について「京都大学文学部美学美術史学研究室

紀要」第一三三号 一九九二年

◎祝允明の小楷書法について「書学書道史研究」第五号 一九九五年

杉浦妙子 日本書道史

◎藤原定家に見る文字の面貌「若木書法」第三号(國學院大學)二〇〇四年

◎流派の発生と「道」の概念についての一考察「書学書道史研究」

第一四号 二〇〇四年

鈴木晴彦 日本近世書道史

◎江戸唐様書家の書論「書道研究」(萱原書房)第四三三号 二〇〇四年

◎王羲之書法を中心とする江戸和様書家の唐様書受容について「書

学書道史研究」第一〇号 二〇〇〇年

鶴田一雄 中国書道史

◎『ヴィジュアル 書芸術全集』第六卷(隋・唐)雄山閣 一九九三年

◎鳥篆考「書学書道史研究」第六号 一九九六年

名児耶明 日本書道史

◎『日本書道史年表』二玄社 一九九九年

◎『書に心よせる』(「美術館へ行こう」シリーズ)新潮社 一九九八年

福田哲之 中国出土古文献

◎『文字の発見が歴史をゆるがす』二玄社 二〇〇三年

◎『説文以前小学書の研究』創文社 二〇〇四年

【監事】

浦野俊則 中国古代の文字と書法

◎『望岳室古文字書法論集』萱原書房 二〇〇六年

◎中学生の書字実態から見た行書体学習に関する考察「千葉大学教

育学部研究紀要」第五四卷 二〇〇六年

野中浩俊 日本近現代書道史

◎『富岡鉄斎—仙境の書—』二玄社 二〇〇二年

◆「第五回野中吟雪書展」於東京鳩居堂画廊 二〇〇五年

【幹事】

小川博章 中国書道史

柿木原くみ 日本近現代書道史

笠嶋忠幸 日本美術史

亀田絵里香 日本近世書道史

高城弘一 古筆学

谷口邦彦 書道教育

永由徳夫 書論書道史

鍋島稲子 中国書法史

森上洋光 漢字作品制作

弓野隆之 中国書法史

草塩藻学書

大英図書館蔵・敦煌文献の調査について

鶴田 一雄

私は昨年八月三十日から十日間、文部科学省の科学研究費でイギリスに出かけた。新潟大学人文学部の関尾史郎氏を中心とする敦煌文献の研究班で、歴史系二人、語学一人、それに通訳と私の計五名である。三日間と半日、大英図書館でオーレル・スタインが招来した敦煌文献を調査するのが目的であった。それまでの三年間は、中国に現存する敦煌文献を調査した。敦煌では研究院、藏経洞、北京では北京大学図書館、国家図書館、その他天津市博物館、浙江博物館などを訪ねた。私は特に写経を中心にしているが、やはり真偽が気になる。北京大学図書館と天津市博物館蔵の写経に李盛澤の所蔵印を捺したものがあり、疑わしいと思った。それについては、藤枝晃博士に論考がある（『徳化李氏凡將閣珍蔵』印について、『學叢』第七号、昭和六十年三月、京都国立博物館）。

大英図書館はオープンであるが、はじめに入館証を作るのが厄介であった。職場での身分証明書は効力がなく、パスポートと運転免許証又は健康保険証のコピーの提出を求められた。私は慌てて家族に国際電話をかけ、ファックスで送ってもらい事無きを得た。また幸いにも受付に日本人の女性がいて、親切にアドバイスしてくれた。

私が申請したのは、左記の十一件である。

- ① 王羲之類書論、杜司軫帖二通
- ② 唐人臨王羲之瞻近帖、龍保帖
- ③ 天宝十四載騎都尉秦元告身
- ④ 化度寺故僧邕禪師舍利塔銘

⑤ 老子道德經

⑦ 高昌里戸籍

⑨ 大般涅槃經第十一

⑪ 樓炭經卷第七

⑥ 隨葬物單

⑧ 十誦比丘戒本

⑩ 誠実論卷第十四

以上であるが、①と⑪については、保存状態が悪いとの理由で実見することができなかった。

②の「瞻近帖、龍保帖」は、二十数年前に『朝日二十人展』の併設展に出品された。紙はベージュ色（粉紅箋）だったと印象に残っていたが、現物が出てきた時には、鳥肌が立つほど感激した。全体に上部が欠落しているが、線は細いものの、筆の弾力を活かし書き進めている。起筆や転折部をしっかりと打ち込み、羲之の特徴である「骨力」が感じられた。

「龍保帖」は二行で、刻帖に比べて線は細いが、行き届いた線である。

写経は四件見た。二玄社の『書跡名品叢刊・六朝写経集』を持参して原件と比べてみた。例えば「大般涅槃經第十一」（梁・天監五年、五〇六年、S八二）は、紙は薄いが良質である。起筆は力強く筆鋒が利いている。全体に墨量がたっぷり、文字は引き締まり、字間も適当にあいているので明るい感じがした。前半と後半とは書き手が異なるのではないかと思った。

二玄社本では、末尾の「天監五年」から五行分がやや不鮮明であるが、原件は線がシャープである。同じ様に「誠実論卷第十四」（延昌元年、五一一年、S一五四七）は、尾題の「誠実論卷第十四」の「卷」の右横に小さく「乙」字があるが、二玄社本では見えない。

以上、調査記録の一部である。本年はパリ国立図書館を訪ねる予定である。

わたしの
工具書1

日本書道史の方法

森岡 隆

日本書道史は日本史の一領域であり、書誌学・国語学・国文学・漢文学・考古学など、幅広い分野に連関しますので、『国史大辞典』のような大部なものから、新刊『日本史必携』のようなコンパクトなものまで、多様な工具書が必要です。書道史では二玄社版『日本書道辞典』が絶版となりましたが、中国書法史・朝鮮書芸史と密接な関係があることから、書学書道史学会編『日本・中国・朝鮮 書道史年表事典』は必需のものであります。その他、思いつくまま種類別に挙げてみます。

まず年表。書跡に記された年号や干支を西暦で確認するには、平楽寺書店の『東方年表』（掌中版・A5判）などを用います。東方の名の通り、中国・朝鮮・日本の年表が併記され、各々の帝王一覧と五十音順の年号索引も附録されています。ただ、この年表で留意すべきは、神武に始まる神話時代の事項は措くとして、一般に天武天皇元年とされる六七二年を私年号の朱雀とし、翌年から天武年として数えていますので、六八五年の天武十四年まで、一年ずつずれがあります。なお岩波書店刊『日本文化総合年表』などでは、典拠とした史料も明示されています。

人名辞典には、全七冊の『古代人名辞典』とそれを縮約・増補した『日本古代氏族人名辞典』、『平安人名辞典—長保二年—』や『国書人名辞典』など、時代別・地域別・分野別のものがあります。補任記録は、三位以上は『公卿補任』、四位以下は『国司補任』などの補任一覧を見ますが、七〇一年から一二二一年までを取めた『公卿補任年表』もあります。

諸家の系図は『尊卑分脈』などに当たりますが、一千頁弱を縮刷した講談社学術文庫版『日本系譜綜覧』は狭い机上で利便です。しかし、いずれにせよ小野道風の系図など、誤りが散見されることも事実です。

江戸時代末までの文献を調べるには『国書総目録』とその続編といえる『古典籍総合目録』や、『国文学複製翻刻書目総覧』等があります。

書跡の読解には、くずし字解説辞典が必要です。児玉幸多編のものや、簡便な古文書判読字典を併用していますが、例えば『楽』の草書のような形が「互」であったりするなど、独特の崩し方もあります。用語は『日本国語大辞典』や時代別の国語辞典などを引きますが、「六借敷」が「難し」であるなど当て字も多く、『古文書用語辞典』も欠かせません。筆者や真贋を確認するには、落款花押辞典の類がありますが、辞典所載の落款印とはいえ、吟味が必要と心がけています。

書写内容は、例えば和歌の場合『新編国歌大観』や『私家集大成』、『平安朝歌合大成』などで検索しますが、継色紙の一点を挙げるまでもなく、出典不詳の歌も多くあります。また漢詩は『漢詩大観』、物語も『源氏物語大成』など、作品ごとに語句検索ができる工具書があります。

古筆関連では、まず『古筆大辞典』。個々の古筆切の収載状況は『古筆切資料集成』などで調べます。図版が収載されているのは『古筆学大成』三十巻ですが、主要図書館でないと閲覧することができません。

その他、多くの工具書がありますが、貧書生の陋屋に完備することは不可能で、図書館の参考図書コーナーに日参することになります。が、辞典といえども完全ではなく、誤りがないわけでもありません。インターネットでの検索が有効な場合もありますが、何を調べるにしても複数の文献を対照することが肝要です。これらを駆使したつもりでも解決することは稀ですが、地道に調べを進める以外に王道はないようです。

随 想

受け手の養成

下野 健児

今年はじめに、東京国立博物館で開催された「書の至宝」展は、近年まれにみる充実した展覧会であった。日本に伝来する「喪乱帖」「孔侍中帖」など中国書法の名品、「高野切」「寸松庵色紙」など日本の名品とともに、上海博物館所蔵の名品が数多く展示され、入場制限がでるほどの盛況だった。国宝をはじめ名品が数多く展示されているとはいえ、書の展覧会でこのように多くの人が集まることはめずらしい。逆にいえば、良いものを展示すれば人は集まるということかもしれない。しかしながら、他の書道展に足をはこぶ人は関係者を除いてごくわずかである、という状況はいいかわらずである。

現代を代表する書家の一人、今井凌雪先生の記事に「現代書への提言―受け手の養成―」（『書を志す人へ』上巻、一九七九年、二玄社刊）というものがある。今からちょうど三十年前（昭和五十一年）に書かれたものであるが、ここで提起された問題は今日においても重要な意味を持つ（以下、《》内は引用）。

《凡そ芸術活動には相手が必要だと思う。それがないと健全な発展は望めない。》書の世界には情報の発信者である書家は数多くいる。しかし、その情報の受け手が絶対的に不足しているのだと。いくら書家がいい作品を作りあげ発表したとしても、その作品を鑑賞してくれる人、受け手がいなければどうしようもない。

《現状を打破するために一日もはやく健全な受け手を養成しなければならぬ。これは他の芸術分野を見ればすぐわかることだ。世間に健全な受け手がたくさんいて、作家の動向に注目し、りっぱな仕事には賞賛を送り、方向を誤ると鋭い批判をする。》もちろん、ここでは受け手の中に研究者、批評家なども含まれている。音楽や美術の世界におけるように、このような健全な受け手を書の世界にも育てることが急務なのである。それでは、受け手は何によって養成できるのか。今井先生が力説されるのは、教育の重要性だ。

《書の理解は本能だけでできるものではない。高い文化のうえに成り立つた芸術だからである。…（中略）これを理解するには、文化に対する理解と鋭い感性を欠かすことができない。それを養うのには教育が必要である。こういった教育にわれわれはどれだけ努力し、関心を持ってきたか。先輩たちもそれをおろそかにしてきたのではないか。書に関する出版物の大部分が習う人のためのものであることを見てもわかるであろう。》

優れた書家を養成することはもちろん重要である。しかし、多くの人が「書の何をどのように見たらよいのかわからない」という現状において、書家を作り出した美を一般の人に理解してもらうためには、それを一般の人が理解できることばで語れる人材が必要となる。健全な受け手を多く育てるためにはこのような人材が欠かせない。

今井先生が三十年前に提起された「受け手の養成」という問題は、現在においてもいまだ解決されないままの状態が続いているといえる。大学で書道を教えるコースが存在する意義の一つはまさにこの「受け手の養成」であると思っている。これはまた、われわれ書学書道史学会の仕事でもある。

第2回研究発表会開催のお知らせ

国内局普及委員会

昨年九月、大東文化大学において初めて研究発表会が開催され、別記のとおり約五〇名が集う盛会となりました。

本年度の第2回も、大東文化大学において下記の通り開催の運びとなりました。ふるってご参加ください。

日時 九月二十三日(土) 祝日

12:40 受付開始

13:00 開会

16:00 終了(予定)

場所 大東文化大学・板橋キャンパス

東武東上線「東武練馬」駅下車、または都営三田線「西台」駅下車

〈研究発表〉

1、「慈光寺経」の伝来

筑波大学大学院博士課程 橋本貴朗

「慈光寺経」は埼玉県比企郡ときがわ町の慈光寺に伝わる装飾経である。鎌倉時代前期を代表する優品として知られるが、その全容は明らかとは言いがたい。そこで本発表では、全容解明の第一歩として、寺伝や地誌、紀行文などをおして、「慈

光寺経」の伝来を明らかにすることを目的とした。あわせて、補写と修復についても検討を加えたい。

2、明代金石学にみる楷書の美学範疇考察

大東文化大学大学院博士後期課程 藤森大雅

明代書壇の主流は帖学であったが、一部には趙崧『石墨鐫華』や、郭宗昌『金石史』といった、宋代の『集古録跋尾』の体裁を踏まえた金石に関する著書も残されている。それらの文献から、明代において展開された金石学の特質を明らかにすると共に、楷書に対する批評語を抽出し、明代の楷書の美学範疇を考察するものである。

〈会員による研究余話〉

改刻された甲骨文字

二松学舎大学特別招聘教授 浦野俊則

殷墟から多量の甲骨文字が出土している。そのうち、極めて少数だが、すでに刻してあった甲骨文を削って、その上に別の文を刻した(改刻した)ものがある。この例を観察して、その意味を考える。

会 員 動 静

○東 国恵(会員) 〓 徳島大学教授定年退職

○浦野俊則(監事) 〓 千葉大学教授定年退職・二松学舎大学特別招聘教授新任

○亀石二三(会員) 〓 四国大学教授昇任

○菅野智明(理事) 〓 筑波大学助教昇任

○鈴木晴彦(理事) 〓 日本大学教授新任

○中村伸夫(常任理事) 〓 筑波大学教授昇任

○樋口咲子(会員) 〓 千葉大学助教新任

○広瀬裕之(会員) 〓 武蔵野大学教授昇任

○森上洋光(幹事) 〓 四国大学助教昇任

計 報

○長島敏悟(南龍) 日本書芸会会長。三月二十二日、死去。八十七歳。

○金子卓義 創玄書道会理事長。三月三十日、死去。六十三歳。

新入会員紹介(肩書は入会時)

安達直哉 S 27年生 大東文化大教授

香取潤哉 S 53年生 台湾芸術大院士

中浜幸子 S 16年生

長沢 薫 S 55年生 秋田県立高教諭

野口泰章 S 49年生 出版社勤務

山本祐司 S 56年生 愛知県立高講師

第1回研究発表会開催報告

平成一七年九月一八日(日)午後一時三〇分より、大東文化大学板橋校舎(3号館)において、第1回研究発表会が開催された。「主として、学生、若手の会員に発表の場を設けて、研究の活性化と研究者の育成を図る」という目的で計画されたもので、約五〇人の参加者を得た。発表者と題目は以下の通り。

〈学生・若手の会員による研究発表〉

- 1、一二世紀書写とされる『和漢朗詠集』の諸伝本について 日本大学助手 山本まり子
- 2、南宋書法にみる「墨跡」の源流について

— 禅僧と文人の接点・張即之書風の伝播を中心に —
筑波大学大学院博士課程3年 峯岸佳葉

〈一般会員による研究発表や余話〉

- 3、二世中村蘭台の書画篆刻 — 一つの文人像 —
大東文化大学助教授 河野隆
山本・峯岸両名は、それぞれ日頃研究している分野を発表したもので、いずれも周到な準備がなされていた。河野氏は、蘭台の様々な書画篆刻作品を實際に示しながら、その人となりをなごやかに話された。また、間近で作品を鑑賞する時間を設けるなど、大変有意義であった。

終了後、参加者からアンケートを記入していた

「時期は適当であった」とする意見が74%。「発表時間について適当である」が57%。「もう少し時間を取って欲しい」が31%。〈学生・若手の会員による研究発表〉〈一般会員による研究発表や余話〉を同時に開催することは「ユニークな企画である」の回答が100%であった。また、今回は会報に載せた以外には特別に広報しなかったが、「特に問題ない」と「もっと広報すべきである」とがほぼ50%ずつであった。全体として好評であり、実りのある研究発表会であったと思われる。

第2回は、以上の結果を踏まえながら、より充実した研究発表会にしたいと願っている。

(国内局長 横田泰三)

《書道史年表》増刷決定のお知らせ

本学会が二〇〇〇年の国際大会開催事業の一環として編集し、萱原書房より上梓した《日本・中国・朝鮮／書道史年表》は昨春秋ごろから版元品切れ状態となりながら、昨秋漸く完成した《日本・中国・朝鮮／書道史〔年表〕事典》との競合懸念もあつて版元判断で増刷が見合わされてきましたが、このほど増刷が決定し、六月には完成の運びとなりました。

今回の増刷に当たっては、前回の「第二刷」の完成から四年が経過していることにかんがみ、版元では中村伸夫・学会編集局長をはじめとする関係役員諸氏の助言も受けながら、その後に判明した誤記等の訂正や、《事典》に一部修正の上収録された「年表」との統一を図ることを主目的とする若干の手直し、また全国的美術館・博物館等の新設・閉館・移転などの情報を反映するための一定の修正等が行われましたが、いずれも

技術的な修正の範囲との版元判断で、奥付表示は「第三刷」として発行されます。

なお、体裁は変わりませんが、クロスは従来のカラフルな三色から、重厚感のある黒の一種類のみとなります。定価は一、三六五円(税込)・送料一八〇円)で変更ありません。会員の一〇冊以上の注文には、一〇%割引・送料無料の特典があります。

また、《事典》についても、版元によるとまだ販売目標の八、〇〇〇部からすると半分以下に留まっている状況とのことです。本書の主旨に照らし、会員各位のご協力を切にお願い致します。定価は一、八九〇円(税込)・送料二〇〇円)で変更ありません。同じく、会員の二〇冊以上の注文には、一〇%割引・送料無料の特典があります。

問い合わせ等は、萱原書房(TEL〇三—三四六二—五二五一、FAX〇三—三四六四—八五二二)へ。

(事務局)

18年度スケジュール表

事務局

4月1日 (土)	《会報》委員会
5月14日 (日)	《会報》第11号発行
6月1日 (木)	第17回大会運営委員会 (於大阪)
6月21日 (水)	第5回書法文化書法教育国際会議 (後援)
7月8・10日	第17回大会発表申込締切
7月15日 (土)	編集局編集委員会
7月中旬	第39回臨時理事会 (於渋谷・桜丘町施設)
7月22日 (土)	《会報》第12号投稿締切
8月10日 (木)	《会報》委員会
9月上旬	第2回研究発表会 (於大東文化大・板橋)
9月23日 (土)	《学会誌》第16号発行
9月30日 (土)	《会報》第12号発行
10月1日 (日)	第40回定例理事会 (於天王寺東映ホテル)
11月10日 (金)	第17回大会 (於大阪教育大・柏原)
11月11日 (土)	第17回大会特別展見学行事 (於大阪市美)
11月12日 (日)	《学会誌》第17号投稿申込締切
12月31日 (日)	常任理事会 (予定)
1月下旬	第3回特別鑑賞セミナー (予定)
1・2月	《学会誌》第17号原稿締切
3月31日	

《会報》への投稿について

《会報》は、これまで役員を中心に原稿を依頼する形態をとってきましたが、昨年度の総会において報告しましたとおり、次の第一二号より、学会会員の投稿も掲載できるようにしましたので、下記の要領にて奮ってご投稿ください。

記

1 投稿期日…毎号、発行日の五〇日前を当該号掲載対象の締切日とし、その後の投稿は、次号の掲載対象となります。会報は現在六月一日、十月一日の年二回発行ですが、前者については一カ月早い発行を検討中です。

2 投稿先…〒150-0003 東京都渋谷区桜丘町二九―三五 書学書道史学会・会報委員会

【投稿規定】

1 投稿資格は、書学書道史学会の会員に限ります。原稿は未発表のものに限り、他誌等への二重投稿はご遠慮願います。

2 内容は、書学書道史及び周辺諸分野に関わるものであれば、ノート・報告・旅行記など自由ですが、利益・宣伝を目的とするもの、及び連載となるものは除きます。

3 掲載は原則《会報》1ページ以内とし、1ページ、1/2ページ、1/3ページの三パターン (いずれも縦書き) を基本に割付します。割付は会報委員会に一任願います。

4 必要なら図版掲載の許可等は、投稿者が行ってください。

5 採否の決定、及び割付・掲載号等は、会報委員会に一任願います。また編集の都合上、タイトルや表記等を改変する場合があります。採否結果は通知しません。《会報》発行日前十日頃にお送りする校正をもつて通知に代えます。ただし、掲載号を次号に遅らせる場合に限り通知します。

6 校正は初校のみです。加筆や大幅な修正はご遠慮願います。校正は原則としてファックスにてお送りしますので、ファックスにて即日お返しください。

7 原稿を掲載した投稿者には、掲載号を別に五部お送りします。

【執筆要領】

1 原稿は、完全原稿を原則としてフロッピーディスクを (入力機種を明記の上) ご提出ください。また、データに加え印字出力した原稿一部 (図表とも) も添付してください。ただしフロッピーは返却しませんので、必ずデータを保存してください。手書きはご遠慮願います。また、作字 (外字) は変換が困難ですので、必ず印字出力をお願いします。

2 使用言語は日本語に限ります。また、文章は原則として常用漢字・現代仮名づかいを使用してください。

3 字数は、五〇〇―一二〇〇字程度を目安としてください。図表も字数内に含みます。

(会報委員会)

談話室

商丘

宮崎洋一

昨年夏、河南省商丘市にある『八閩齋会報徳記』の調査に同行させていただきました。

七七年、六十四歳の顔真卿が巨大な八角の石幢に書いた作品で、原石は会昌の廃仏の際に壊され、八五一年に再刻されたものです。これまで、その石幢自体に関する情報はほとんどなかったのですが、このたび、その大きさと現状を実感することが出来ましたし、近くにある侯方域（一六一八～五四四年）の故居を見学できて、『壮悔堂文集』に他の書に関する文章はないのに、なぜ『八閩齋会報徳記』の文章だけがあるのかよくわかりました。その場に行くことの大切さを改めて勉強させていただきました。

竹田國子の短冊

広瀬裕之

会津の歌人・竹田國子の書いた短冊を読んでもほしいという依頼が、その子孫にあたる竹田家からあった。國子の実父は山内香溪、祖父は香雪という。

会津の文化史の資料等をあたって行くと、國子は、歌をよくしただけではなく、書の方では「市河米庵―山内香雪―山内香溪―竹田國子」という系譜が成り立つことが判った。

國子の実家山内家の墓所が東京三田にあることが判り、國子の生年を知る

手掛かりがないか調べに行った。なによりもびっくりしたのが、なんと中林梧竹の墓が、國子の実家の墓地敷地内に建立されていたことである。祖父香雪は、江戸時代の大家米庵の高弟であり、中林梧竹の師匠である。研究が進むにつれて、意外な人物と結び付いてきたことに驚きと感動を覚えた。

中国の学生気質

讃岐浩史

去る三月三十日、杭州の浙江大学で、神戸大学・浙江大学学術討論会が開かれた。

その質疑応答で、浙江大博士課程の学生から魚住和晃教授に次の質問が飛ぶ。「今、中国書法教育学史をテーマに論文を書いています。西川寧、中田勇次郎の二人にはこの方面の論文はないようですが、他に日本で発表されたものはないのでしょうか」と。私は、彼の前後の語り口から「日本では書けまい」との本心が窺え、日本書学の盲点を突かれたようで、少々複雑な思いを抱いた。しかし、他方、十八年前の私の留学時と変わらない中国学生の持つ熱い心意気と高い自負心に触れられて懐かしくもあつた。

何君閣道摩崖の再発見 高澤浩一

表題の摩崖（後漢・中元二年）は、文献の上では、蜀郡太守何君閣道碑といわれ、南宋・洪适が『隸釈』にも録したが、その字蹟の実態を伝えるものでなく、しかもその後は亡佚したと考えられていた。

ところが、先頃、四川省榮經県の狹

谷中において偶然に発見され、一報を『中国文物報』（二〇〇四・四）が伝えた。次いで『雅安新出漢碑二種』（巴蜀書社）が公刊されるに至った。

その報に接するや、逸速く現地を訪れ調査を果たした。字蹟は、榮河溪谷の懸崖に刻まれた古隸の摩崖であつた。その全容は、今秋の書学書道史学会において発表できれば、と考えている。

編集後記

◆連休中の一日、自宅から団子坂を下り、三崎坂から言問通りへ出る途中、鳴鶴の碑に出会う。最澄と天台の国宝展を見、東洋館で高島コレクションをゆっくり鑑賞。先日菊次郎翁令孫浩氏より、本来は高嶋ですが、祖父は字が嫌いで、ほとんどの場合高島と記していました、とご教示いただいた。

(柿本原くみ)

◆昨年一年間、高校の先生方と共に「書の鑑賞」について考えた。古典作品が今に伝存するだけで大変なことだ。だから誰しも見たくなるし、知りたくなる。研究者間では「知識がなければ鑑賞などできない」という声も少なくないが、ならば専門家たちは皆、書の美しさや面白さを伝えるために、これまでどれほどの努力をしてきたのだろうか。

(笠嶋忠幸)

◆先日、田端文士村記念館ホールで藤田本草堂氏の「鵬齋とおでん屋」を聞いた。龜田鵬齋とおでん屋の主人との心温まる人情話は、江戸庶民に愛された鵬齋の人物を髣髴とさせて実に興味深く、楽しいひと時を過ごすことができた。

(亀田給里香)

◆科学技術の分野では、異業種交流が盛んに行われ、既にかなりの成果をあげている。このところ、「コラボレーション」という言葉がしばしば登場するが、学問においても異分野との共同研究の必要性を感じる事が多々ある。「連携」によりはつきり、更なる発展が期待される時代の到来を感じている。

(山本まり子)

◆先日呉延康題記の塚文拓本を観ました。そこには出土地として、涌金門とか清波門といった杭州留学中の散歩道の名をみつけ、懐かしんでいましたが、今春の旅行ではその道の存在さえ気づきませんでした。

(小川博章)

◆一昨年暮れに書家・栗原蘆水氏から村上翠亭先生のもとに、手鑑・手鑑崩し台紙貼りやマクリ等、都合三百葉ほどの古筆切や短冊数百点が搬入された。以後、私も調査・研究に加わり、今春、栗原氏に成果を報告。それらの古筆切を優品手鑑や手鑑数帖、台紙貼等にした作品が、四月八日から五月二十一日までふくやま書道美術館で、「日本の書」展の一部として公開された。

(高城弘二)

◆区役員会の発足に合わせて、会報委員には小川・柿本原・笠嶋・高城の四幹事に再任願したが、各氏ともお忙しいこともあり、新幹事亀田さんと会員山本さんの若い力もお借りすることにした。Ⅷ期の委員長を務められた杉浦理事と、今期委員を快諾いただいた六氏に感謝申し上げる。

(鳳)